

議事録（議事要旨）〔第 6 回会議〕

1. 日 時 平成 31 年 2 月 1 日（金） 13：00～15：00
2. 場 所 福井県庁 7 階 特別会議室
3. 議 題 （1）計画の見直しに向けた今後の課題について
（2）基本計画の策定スケジュール（案）について
4. 出席者 進士五十八座長、安達洋一郎委員、荒瀬克己委員、
石井パークマン麻子委員、五十川早苗委員、宇佐美嘉一委員、
角野俊彦委員、佐々木知也委員、中嶋茂男委員、
林正岳委員、吉川雄二委員
東村健治教育長、吉井正雄教育委員、西野里佳教育委員、
南部隆保教育委員、山本直子教育委員

5. 議事要旨

<議題 1>

（高校教育）

- 事務局から、「計画の見直しに向けた今後の課題」について説明した。
- 委員から、福井県では、進学校だけでなく、多様な高校が地域への関心、愛着を育みながら探究学習に取り組んでおり、全国的にも注目されている。新聞を読まない生徒に対しては、探究学習で新聞を活用することも考えられるとの発言があった。
- 委員から、新聞は「気づきのメディア」と呼ばれ、自分が普段関心を持たないニュースまで目に入るので、世の中の動きを知るよいツールとなる。地元への愛着を育むきっかけになり、主権者教育や消費者教育にも役立つのではないかと発言があった。
- 委員から、新聞のリード文を読むことにより、文章をまとめる力を養う訓練になる。日曜版に載っている書評を読めば、本に対する興味も沸いてくるとの発言があった。

- 委員から、新聞を読むだけではなく、同時に辞書を引くことも大事である。ICT化が進み、大人も子どもも合目的なことしかやらなくなっているので、高校生の新聞づくり（NIE）などの取組を地道に定着させてほしいとの発言があった。
- 委員から、問題文と設問が別ページになるだけで理解力が落ち、平均点が下がる。また、英語で興味の薄い経済に関する内容が取り上げられると平均点が下がる。新聞を読まないで英語のアウトプットの力も落ちるところがあるので、そういう意味で、すべての教科の基本は国語力であるとの発言があった。
- 委員から、キャリア教育に時間をかけるよりも、教科の授業をやりたいという教員が多いのではないかと思う。キャリア教育の重要性を再認識してほしい。高校卒業生の離職率が高いと言われるが、教員はどんな企業で、何を作っているのかも知らずに進路を指導しているのが実態で、ミスマッチが起きているとの発言があった。
- 委員から、教員採用試験の面接では、新聞を読んでいないと答える人が多い。教員が新聞を読まないのに、それを生徒に強要するのはどうかと思うとの発言があった。
- 委員から、すべての学びが、子どもたちの生き方や考え方に影響を与えるはずである。教員研修では、なぜ、教科の学びが必要なのかをより深く考えさせ、教員の意識を改革してほしい。教科の横のつながりと、18年間の縦のつながりも研修計画に入れ込むことが望ましいとの発言があった。
- 教育長から、18歳までに職業観を醸成することは難しく、基礎学力を育成する中で、それが将来どう活かされるのかという問題意識を持ちながら教えることが重要であるとの発言があった。
- 委員から、キャリア教育について、国が言っている「基礎的・汎用的能力」とは、バラバラに見えることが実は一つにつながっているとか、全く別のところに答えがあるかもしれないという想像力を働かせることであり、大事なことはつなぐ力であるとの発言があった。

- 委員から、成人年齢引き下げに関して、主権者教育や消費者教育をする時間がないということだが、ひとつずつ切り分けずに、教育活動全体の中でどう関連付けるかを考えれば、それほど時間は掛からないとの発言があった。

(国際理解)

- 委員から、国際理解教育を、英語指導ではなく、異文化理解という発想で進めてほしい。その第一歩として幼児教育は重要であるとの発言があった。
- 委員から、子どもたちの異文化に対する順応力は高いが、それについていけないのが保護者ではないかと思う。生涯学習の一つとして異文化を学ぶ場を提供し、親子での参加というところで国際理解を深めることも重要である。将来的にはICTを活用して外国と教室が結び付くような学習も考えてほしいとの発言があった。
- 委員から、比較できるから、自分の当たり前が他者にとってはそうでないことに気づかされる、というところが国際理解の大きなポイント。例えば、ロングホームルームや生活科、道徳などを組み合わせて90分の授業とするなど、いろいろなことができるので、教員研修の中で、教員の意識を少しずつ変えていくことにより、国際理解のカリキュラムをマネジメントできる教員が増えていくのではないかと発言があった。
- 委員から、県内企業はアジア諸国とのビジネスに比重を置いており、入社後、アジアの人たちとコミュニケーションをとり、同僚としてやっていく人生を送る子どもも少なからずいる。そのため、外国の文化や社会、歴史の違いを正しく理解するとともに、人として同じ共通項も多いということを理解できるような授業とすることが大事であるとの発言があった。
- 委員から、英語教育を言語教育に限定しているところがすでに問題であり、むしろコミュニケーション能力の育成が重要であるとの発言があった。
- 委員から、高校入試制度（英検加点）がまた変わるのではないかと不安に感じる保護者の声がある。ころころ変えるようなことは避けてほしいとの発言があった。

(体力・運動能力)

- 委員から、体力・運動能力調査の種目であるボール投げや50m走、中距離走など、体力測定の実行(投げ方や走り方)を真剣に教えることがない。運動能力は幼児期に80%、小学校4年生で90%が決まってしまう。多くの人は勘違いしているが、ここで必要なのは体力ではなく、巧緻性やバランス、リズム感であるとの発言があった。
- 委員から、スポーツのけがは95%自然治癒する。残り5%をどうケアするか、子どものスポーツ障害者をどう防ぐかが大事であるとの発言があった。
- 教育委員から、「健康で元気に長生きする力」について話をすると、栄養のバランスについては養護教諭や栄養教諭が教えているが、小さい頃から栄養バランスを考え料理する力を養うことはよいことであるとの発言があった。また、長寿化や高齢化、がんの問題は、高齢者だけの問題ではなく、将来は自分の問題になるという視点で教えないといけない。学校保健委員会や授業を通じて、充実してほしいとの発言があった。
- 教育委員から、歯の噛み合わせが悪いと集中力も下がり、顎関節症、腰や首の病気などの原因になる。歯の問題は単に健康問題だけでなく、学力や生活の質を上げることにもつながるとの発言があった。
- 委員から、小中学校では全教科を網羅し、部活動も健康教育もやっているが、すべてが将来の役に立つという視点ではなく、その中の何が自分に向いているかを考えさせることが大事ではないかと思う。高校では普通科や職業科もあり、そこに行くまでの進路指導をしっかりしないと、すぐに仕事を辞めてしまうことにもなるとの発言があった。

(その他)

- 委員から、次期学習指導要領の柱は「カリキュラムマネジメント」である。各高校でも「どんな生徒を育てたいのか」を議論されていると思うが、県教委がそれを応援することが大事であるとの発言があった。

- 委員から、今回の学習指導要領は、幼稚園から高校まで一貫した資質能力の育成ということを行っている。高校から小中学校にこういったことをもう少しやってくれませんか、小中学校の学びで重複するものは高校ではもうやらないということで、その分の時間を別のものに使うなど、十数年間の学びの連続の中で、それこそ大きなカリキュラムマネジメントが必要であるとの発言があった。
- 委員から、キャリアパスポートについて、また負担が増えたという考え方ではなく、小中学校と高校とのつながりの中でどう位置付けていくのかということ県が主導して実施してほしいとの発言があった。
- 委員から、多忙な教員に今以上のことを求めるのは酷である。教職に魅力を持たせるという意味でも、教員の業務を分業化できないか。時間的な余裕を持った教員がキャリア教育をするということになれば、なおよい教育ができると思うとの発言があった。
- 委員から、「伝統文化」は人の心の支えになり、人間形成の礎でもある。あくまで余裕を持って「伝統文化」と接し、教養を身に付けるという意味合いで親しんでほしいという発言があった。
- 委員から、臨時的任用教員について、何年も担任を受け持ち、採用試験に合格した教員と遜色なくできている場合、採用してはどうかとの意見があった。別の委員から、休職する教員も多くなっており、代替教員も見つからない現状があるので、採用して1年経った頃、教員に向いているかどうかの評価があってもよいのではないかと意見があった。
- オブザーバーから、保育士や幼稚園教諭の資格を持った人材が給与や待遇面で都会に流れており、人材不足が課題となっている。福井に戻ってもらえるよう何か手を打てないかと発言があった。
- オブザーバーから、予算の関係で、社会教育主事が各市町の教育委員会に派遣されなくなったと聞いている。社会教育の充実が地域を作り、学校と連携すればよい形で進んでいくと思うが、学校と市町の社会教育部局をつなぐことはできないかと発言があった。

- 委員から、教員がどんなによい教育をしても、保護者が全く違うことを言っていると、子どもは困惑し、マイナススパイラルに陥ることも多いのではないかと。自分だけでは気持ちを切り替えられないとき、本や音楽、映画、絵画などが発想を転換するきっかけになるということを教えてあげるとよいとの発言があった。
- 委員から、健康教育については、ポジティブメンタルヘルスという考え方が注目されている。簡単に言うと、楽しい学校を作ってほしいということである。また、いじめ・不登校にも通じるが、レジリエンスを高める教育が大事である。レジリエンスを高める方法としては、自己肯定感を高めることと、ソーシャルサポートを増やすことが考えられるが、そういったストレスマネジメント教育や、困ったときに助けを求められる教育を、スクールカウンセラーを十分活用し、学級活動などにも取入れられるとよいとの発言があった。
- 座長から、全体的な問題は保護者が一番わかっているはずだが、それを学校に任せておいて、いざ問題になると教員を責めるから現場はたまったものではない。保護者の集まりなど、楽しいポジティブメンタルヘルスやウェルビーイングを目指した運動が一方にあると、教育行政ももっと健全になると思ふとの発言があった。

<議題 2>

- 事務局から、「基本計画の策定スケジュール（案）」について説明した。
- 座長から、次回の会議は7月に開催する。その間、委員にはヒアリングなどでご連絡差し上げるとの説明があった。